

月山から旧『^{どうちみち}道智道』単独全徒歩スルーハイク記録
(調査を兼ねた歩行記録)

2017 (平成 29) 年 12 月 1 日 (金)

大沼 香

1. 調査の目的

本記録は、旧「道智道」（道智上人が開削したと伝えられる湯殿山参詣の古道）について、月山から黒鴨までの区間を実地に歩き、その道筋および関連史跡の現況を確かめた結果を整理したものである。併せて、月山お秘所の一つである東補陀落を参拝するとともに、古道沿いに残る石碑群、旧集落跡、信仰遺跡等の状況についても観察・記録したものである。

2. 調査概要

(1) 実施日

2017（平成29）年8月26日（土）～8月28日（月）の2泊3日間である。

※旧「道智道」の実踏査区間は、8月27日（日）～8月28日（月）の1泊2日間である。

(2) 踏査区間

月山弥陀ヶ原（八合目）⇒志津⇒大井沢⇒古寺⇒朝日川⇒旧萱野集落跡⇒荃ノ峯峠⇒標高580m地点⇒白鷹町黒鴨である。

(3) 歩行距離

総歩行距離は約59.7kmである。うち旧「道智道」は約42.9kmである。

(4) 調査方法

携行したガーミン社GPS機（Oregon 650）により歩行軌跡を記録し、国土地理院地形図上で踏査ルートを確認した。また、現地に残る石碑、旧道形、集落跡等について目視確認を行い、聞き取り情報と合わせて整理した。

3. 日単位の概要

[前日]

2017（平成29）年8月26日（土）は、自宅を出発し、バスを乗り継いで月山八合目に12時45分到着し、まず東補陀落を往復した。密教における月山金胎両部界のうち、金剛界東補陀落を象徴する、ほぼ垂直に立ち上がる岩峰に出会うことができた。幸いにも、秋の峰入り（羽黒修験道山伏修行）のために数日前に道の下刈りがなされており、大いに助かった。

この日は、月山弥陀ヶ原の中之宮御田原参籠所に宿泊した。

なお、金剛界と対を成す胎蔵界の西補陀落には、前年の2016（平成28）年10月13日（木）に行っている。宿泊先の同参籠所で、その時に同行した神職の吉住さんと、思いがけず仕事中に再会することができた。予期せぬことであり、とても幸運に感じた。これで、念願であった月山の金胎両部界のお秘所を参拝することができ、満足したのである。

[1日目]

2017（平成29）年8月27日（日）は、地上天気図の高気圧、高層天気図における等高度線の盛り上がり具合から見ても終日快晴の予報であったが、そのとおり、昨晚の雨とは一転して、当日は早朝から快晴となった。途中、九合目小屋管理人の工藤さん（上記西補陀落同行）とも再会した。

月山山頂からは360度、名だたる山塊・峰々が一望できた。夏は雨模様でなかなか天気に恵まれなかったことから、“待ってました”とばかりに、羽黒口、湯殿口、西川口から老若男女の大勢の登山者が数珠つなぎで登っていた。月山には10数回以上登っているが、初めて見る光景であり、おそらく千人くらいは山頂を踏んだのではないだろうか。これは決して誇張ではなく、通常の登山日に比べても異例の人数であった。

さて、問題意識として残っているのが、後記9ページの図の中で、旧「六十里越街道」と旧「道智道」の合流点 P1 からアンテナ P2 へ至る大平地区・弓張平公園内の旧「道智道」古道ルートはどこなのか、という点である。全体から見ればごく短い区間ではあるが、古道ルート確定の観点から一応整理しておくこととした（16・17 ページ）。

この日の宿は大井沢中村地区の江戸屋旅館とした。まずは、隣接する大井沢温泉「湯ったり館」の風呂に入り、くつろいだ。宿泊客は私一人のようであったが、快く泊めていただいた。同館のご主人佐藤さんは同古道に精通している方で、自ら歩いて探査・調査を行っており、貴重な話をたくさん伺うことができ、大変参考になった。大井沢地区西側の山際には、所々途切れてはいるものの、同古道がまだ大方残っているとのことであった。機会があれば歩いてみたいと思っている。また、旅館業を始めて本年で100年になることを記念し、「江戸屋旅館創業100周年記念」誌を作成したとのことを見せていただいた。私は二代目ではあるが、両親と私たち家族のことを何らかの形で子どもたちに残したいという臍げな希望を抱いており、すばらしいものを拝見して、大いに参考になった。

[2日目]

2017（平成29）年8月28日（月）は、予報どおり曇りであった。（もし今回と逆のコースであれば、この日が月山となり、おそらくガスで見えないか、雨模様だったかもしれない。）

印象に残るのは、12ページに記述する、古寺より800mほどの西俣川沿いにある湯殿山碑である。20年ほど前、古寺を訪れた際に土地の人から伺って一度訪れたことがあった。正確な場所の記憶は薄れていたが、11ページに記述する古寺の古老から再確認して訪れたものである。道路（車道）上からはまったく見えない。建立年の確認は失念してしまったが、裏側には多くの寄進者名が刻まれている。

そして、朝日川越し（木川ダム上流部）が問題となった。白鷹町の伊藤隆さんから事前に聞いていたので、木川ダム上流の発電所（山形県企業局朝日川第二発電所か）に至る構内用橋梁を渡って右岸に渡った。ここまでは難なく順調であったが、さて同古道へはどこをたどればよいのか、皆目見当がつかなかった。直感的に送電線鉄塔の方へ階段を上ると鉄塔脚部に至った。ここで思案したが、北東の方に藪を漕いだような切れ目があったので覗いてみると、境界杭の設置場所であった。そこから川の方角を見ると比較的平坦な杉林になっており、そちらではないかと思って足を延ばしたが、結局、古道らしきルートは発見できなかった。

旧吊橋崩落地点（13ページ）は分かっていた（過去に黒鴨からこの地点まで2回往復している）ことから、GPS機搭載地形図で確認し、一旦小さな沢に降りてその方向によじ登ったところ、同古道に合流することができた。その点から戻るように、先ほどの鉄塔の方まで古道を歩いて出口（入り口）を確認した。そこからは再び同古道をたどり、ついに旧吊橋崩落地点に到達した。後は知り尽くしたルートであり、不安はまったくなく黒鴨へ向かった。

なお、発電所から旧吊橋崩落地点までの間には、道形からして古い巻き道があったように見受けられた。では、その目的は何だったのか。というのも、崩落した吊橋がその地点で兩岸をつないでいたことからすれば、そこから発電所までの巻き道は同古道そのものではないと思われるからである。

旧萱野集落跡の箇所は細部13ページのとおりであるが、事前の私的調査の中で、明らかに同古道であったと思われる道筋を確認していたので、藪漕ぎではあったが今回もそのルートを歩いた。

その後は、途中、前出の伊藤さんから得ていた情報を確認しながら黒鴨を目指した。15ページに記述した標高580m地点の7基の石碑群については、2016（平成28）年8月26日（金）付山形新聞にも報道された（補完資料-4の図平成4-3）が、見事な石碑群であった。さらに、今も他所に

現存する社殿があったということ（細部は【補完資料-1】）から、当時の状況を想像するのも楽しかった。そして、ついに黒鴨の蔵高院前に到達し、ここを今回のスルーハイクのゴールとした。

4. 全体行程

以下の図柄（国土地理院地形図を切り取り）中の赤い線は、持参・携行したガーミン社の GPS 機器（Oregon650／地図搭載・緯度経度および時刻を自動記録）による踏査結果の軌跡（足跡）である。その他の柵状のマークは、GPS 機のボタン押下により指定した各種ウェイポイントを表示している。月山弥陀ヶ原（八合目）から黒鴨までの歩行距離は約 59.7km となった。うち旧「道智道」のみでは 42.9km である。

◎前日；2017（平成 29）年 8 月 26 日（土）／月山八合目は曇り、時々濃霧
山形→（バス）→鶴岡→（バス）→羽黒山→（バス）→月山八合目
バスを下車した後は東補陀落を往復し、『月山神社 中之宮 御田原参籠所』に投宿した。

◎1 日目；2017（平成 29）年 8 月 27 日（日）／終日快晴
中之宮⇒月山⇒志津（昼食）⇒大暮橋（月山湖）⇒大井沢中村と歩き、江戸屋旅館に投宿した。
（歩行平均時速 2.8km）

◎2 日目；2017（平成 29）年 8 月 28 日（月）／曇り
中村（江戸屋旅館）⇒（地藏峠・標高約 650m）⇒古寺⇒（山毛櫨〔ブナ〕峠・約 720m）⇒朝日川横断（橋）⇒（荃ノ峯峠・約 880m）⇒白鷹町黒鴨と歩いた。ここからは、バス時刻との兼ね合いで荒砥駅までタクシーを利用し、荒砥駅→（バス）→山形駅前とつないで帰宅した。
（歩行平均時速 3.2km）

< 区間毎のポイント >

.....

□ 9 ページに係る同古道ルート of 検討 (拡大図) その 1

□ 9 ページに係る同古道ルートの検討（拡大図） その2

5. 歩いてみて見えてきたこと

旧「道智道」は、道智上人により開削されたと伝えられる湯殿山参詣の古道であるが、今回あらためて月山から黒鴨まで通して歩いてみると、単なる古い通行路ではなく、信仰・生活・土地の記憶が幾重にも重なった道であることを実感した。

道形そのものは、今なお相当部分に残っており、ところどころ不明瞭な箇所や探索を要する箇所はあるものの、石碑、旧集落跡、信仰遺跡などが道沿いに連なって現れ、かつてこの道が確かに人々の往来によって支えられていたことを物語っている。

なかでも黒鴨から荃ノ峯峠にかけての約 5km 余りの区間には、蔵高院の即身仏発掘地点、多数の石碑群、旧集落跡などが密に残されており、短い区間でありながら非常に濃密な歴史空間を形づくっていることが強く印象に残った。

また、歩行の途中で出会った地形の癖、道筋の消長、橋や巻き道の痕跡などからは、古道が一様に固定された一本の線ではなく、時代ごとに補修され、付け替えられ、使われ方を変えながら生きてきた道であることもうかがえたのである。

6. この旅を終えて

今回の歩行は、旧「道智道」の現況を確かめるという意味を持ちながらも、私にとってはやはり、月山から黒鴨へと続く一つの長い旅であった。

月山のお秘所である東補陀落に始まり、大井沢、古寺、朝日川、旧萱野集落跡、荃ノ峯峠を経て黒鴨に至るまで、道は単に地点と地点をつなぐだけではなく、信仰の記憶、生活の痕跡、人の営みを次々と見せてくれたのである。

ことに、現地を実際に歩いてみなければ分からない道の残り方、地形とのなじみ方、石碑の置かれた位置関係などは、机上の資料だけではつかみ切れないものであり、今回の歩行によって得た実感は大きかった。

本記録は、そうした旅の過程で見たもの、感じたもの、そして確認できたことを整理したものである。今後さらに現地に通り、まだ掴み切れていない歴史の奥行きにも触れてみたいと思っている。

7. 完歩後の感想

すばらしい古道であった。道智上人（大井沢旧大日寺中興の祖）が開削し、多くの湯殿山信者や修験者（行者）が信仰の道、修行の道として歩き、また生活道としても踏み固めてきた古道である。私もそこに一步を重ねることができ、往時の時空にタイムスリップしたような感慨を覚えた。

事前に前出の伊藤隆さんを何度か訪ね、道の状況に関する情報を得ていたことから、通常取り組まれる向き（黒鴨→大井沢→志津）とは逆の行程になったが、不安にかられることなく無事に所期の目的を達成することができた。

伊藤さんからは、古道の状況、史跡・石碑の安置場所とその設置事情、今は廃村となった集落のことなど、歴史的背景に関わる多くの情報をいただき、大いに助けられた。

伊藤さんによれば、最も難儀を要した区間は、荃ノ峯峠から朝日川木川ダム上流部発電所までの間であったという。この区間はまったくの山中を貫く古道であり、林道とも複雑に交差している。伊藤さんと白鷹町史談会長の丸川さんは、そこに何度となく通り、藪を漕ぎながら古道筋の探査・発見・確定にあたり、道沿いの草木の下刈り、難所へのロープの取り付け、崩落箇所の道普請などの整備に汗を流されたそうである。そのような多大な労力と経費をもって整備されたことに、篤く敬意を表したい。お陰様で安全に歩くことができた。本当にありがとうございました。

さらには、前出のお二人をはじめ白鷹町史談会の皆様、そして有志の方々も助力されたと聞いている。そして皆様方は湯殿山まで既に2回も歩き通し、道を固められたのである。道形が不明瞭な箇所はあったものの、危険を感じるような場所はほとんどなかった。

また、2016（平成28）年2月13日（土）に開催された「白鷹町史談会研修会」に参加していたが、その時に皆さんが語っていた熱い思いと決意が、今回の歩行の大きな力となった。

私は過去に黒鴨から旧吊橋崩落地点（13ページ）まで2回往復していたが、このたび旧「六十里越街道」との合流（追分）点（9ページP1点）から黒鴨までの同古道を一気通貫で歩くことができたことには、格別の感慨がある。同古道の復元に携われた皆様方のご努力に甚深なる敬意を表し、重ねて感謝を申し上げたい。

この古道には、私がまだ掴み切れていない歴史が数多く残っている気がする。もう少し現地に通ってみたいと思っている。

また、黒鴨から莖ノ峯峠までの古道沿いの距離は約5km強であるが、この区間には蔵高院の即身仏（ミイラ）の発掘箇所をはじめ、後述するさまざまな歴史遺産がある。この短い区間に、真に貴重な文化財が密度高く眠っているのである。関係者も考えているようであるが、大げさな観光客誘致とまではいかなくとも、近年注目されているクアオルトコースとして十分な価値を有するのではないだろうか。

この同古道沿いの史跡等のうち、私が特に関心を寄せた箇所については、補完資料として後記する。

終わりに

旧「道智道」の存在を最初に知ったのは、2012（平成24）年の秋、西川町交流センター「あいべ」町民体育館敷地内で開かれていた菊祭りを見に行った折、同センター内に掲示されていた旧「道智道」に関するパネルを目にした時である。他の歴史街道をスルーハイクしていた頃でもあり、自然と釘付けになった。ここから関心を強め、動き始めたのである。

古道とはいえ、ただの道であれば、ここまで思い入れは深まらなかったかもしれない。【補完資料-4】26ページ以下の新聞記事に接したこと、2016（平成28）年2月13日（土）に開催された「白鷹町史談会研修会」に参加したことなどから、一気通貫で歩いてみたいという思いが強まり、このたび実践に至った。

これまで山形県内に関係するものとして、いずれも単独歩行で、旧「六十里越街道」は一気通貫の往復（鶴岡→山形、太平洋は閑上→旧六十里越街道→日本海は湯の浜）、イザベラ・バードが歩いた旧「越後米沢街道・十三峠」はほとんど、旧「羽州街道」は全区間（福島・桑折〔こおり〕→山形→秋田→青森・油川）など、その他の歴史街道（古道）も歩いてきた。その中で、この旧「道智道」は地味ではあるが、要所に追分石ほか多くの石碑が残されており、想像力をかき立てられる史跡が道沿いに連なっていて、とても楽しい。

特に【補完資料-1】に記述した内容は、陰陽五行説と易経に関わるものである。現代ではあり得ないと思われるかもしれないが、江戸時代までは神仏混淆の時代であり、そうした思想は生活に密着していた。単なる迷信ではなく、命を懸けた真の信仰・祈りであったと思われる。今の私は、それを想像力醸成の遊びとして受け止めているが、その背景にある世界観には強く惹かれるものがある。

私の探求心・好奇心を誘発してくださった皆様に深く感謝申し上げたい。ありがとうございました。（完）